



総合科学部講義棟

プログラム

◎記念講演（同時通訳つき） 「追憶・哀傷そして責任」

日時：11月1日(水)13時
場所：総合科学部大講義室

◎「シュミット氏と 学生との 対話集会」

日時：11月1日(水)講演終了後～
場所：総合科学部南講義棟
L201号教室

PROFILE

(いしだ・まもる)
 ◇1933年広島県生まれ
 ◇1956年広島大学政経学部卒業
 ◇爾後、伊藤忠商事にあって財務業務を担当
 ◇現在は伊藤忠ファイナンス常任顧問・早稲田大学大学院法学研究科非常勤講師
 ◇趣味 自然、音楽、美術、宗教思想の中に「美」を探求すること

シュミットさんは、アジアの中で「隣人あれど友人なし」の日本の将来を心配している。歴史を正直に認めずに済まそうとする日本の態度に、アジア諸国が不信感を捨てきれないと言うのである。日本はアジアの中では生きていくのであろうか。

「一部の日本人が日本の戦争責任は広島と長崎の破壊で帳消しにされたと考えるのは重大な誤りだ」とシュミットさんが言うのは、こういう事情からである。加害国家ドイツが加害者であったアウシュヴィッツと、アジアでの加害国日本の一般市民が被害者となつたヒロシマの歴史的文脈は、同じではあるまい。

私はシュミットさんに、日本の植民地支配と戦争について謝罪を述べた平岡広島市長の平和宣言を送り、広島市民は自らと自らの死者に起きたことを耐え、ヒロシマをより広い歴史の文脈の中で理解することを学んできたと伝えた。「安らかに眠つて下さい、過ちは繰り返しませぬから」と刻んだ慰靈碑の前で、シュミットさんは何を思い、それをどのように語られるであろう。

ヒロシマをどう理解するか

シュミットさんは、ヒロシマの学生たちと、戦争と平和、過去と未来について語り合う気持ちをお持ちではない訳でしようか。今世紀の悲劇の象徴アウシュヴィッツとヒロシマをどのように歴史の文脈で理解されるのか、語つていただけませんか」と問い合わせたことが、今回の広島訪問のきっかけになったからである。

シュミットさんの来広について書くには、アウシュヴィッツに触れない訳にはいかない。私が「ヒロシマの学生たちと、戦争と平和、過去と未来について語り合う気持ちをお持ちではない訳でしようか。今世紀の悲劇の象徴アウシュヴィッツとヒロシマをどのように歴史の文脈で理解されるのか、語つていただけませんか」と問い合わせたことが、今回の広島訪問のきっかけになったからである。

将来を担う若者たちは?

若者たちは良い大学を経て良い就職を目指すか、フルストレーリングを持ちながらも真剣にプロテストするでもなく、享樂に走るか、いずれにしても方向性を喪失しているのではないか、シュミットさんは気にしている。

「低俗なテレビ番組を見ていると、将来の日本を壊して帳消しにされたと考えるのは重大な誤りだ」とシュミットさんが言うのは、こういう事情からである。加害国家ドイツが加害者であったアウシュヴィッツと、ヒロシマの歴史的文脈は、同じではあるまい。

最近かなり老けられたシュミットさんをテレビで見て、私が思い出したのは一九八九年に「歐州統合そのものは無理としても、統合についての合意だけは見届けた上で世を去りたい」と言われたことである。ドイツと近隣諸国の和解と欧州統合へのシュミットさんの熱い思いである。それによってのみドイツが再び歐州の支配勢力になることを阻止できるというのである。シュミットさんが自國を見る目は厳しい。隣人たちがドイツの誠意と平和への意志を疑うことがあつてはならないからである。日本に対しても厳しいのは、同じことがアジアの中の日本に当てはまるからであろう。シュミットさんは日本の友人なのである。

マーストリヒト条約は締結されたものの、最近では欧州統合の先行きについての不透明感が高まっている。統合を妨げる経済的窮状や政治の混乱を聞くにつれ、私はシュミットさんの心中に思いを馳せる。シュミットさんの願いは叶えられるのであろうか。

広島大学での記念講演は「追憶・哀傷、そして責任」と題されている。シュミットさんは生涯の体験と思想を語られるのであろう。

人類共同体と共生の願い

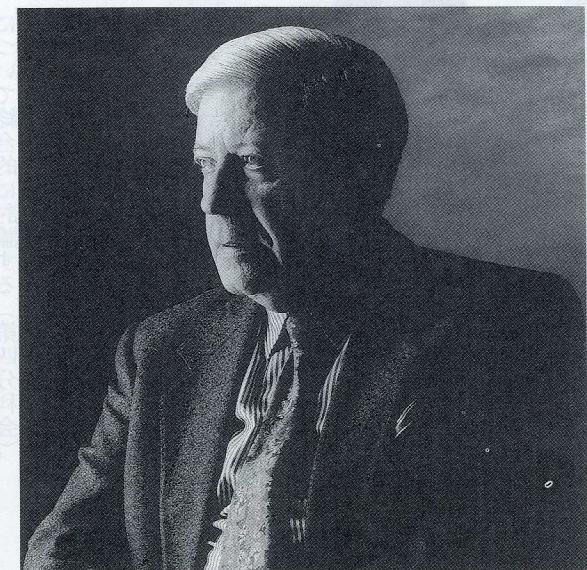
れることはできない。歴史を出来事と行為の単なる因果と解してはならない。義務と責任を伴うのだ。将来を成り行きに任せではなくならない。

ドイツが近隣諸国民の信頼を得て、欧州統合の中心メンバーとして受け入れられるようになつた鍵はここにある。シュミットさんは米ソ対立の困難な状況の中で現実政治の舵取りを強いられたが、道徳を政治の基礎に置く信念を失うことなかつた。

日本の日中戦争への道、太平洋戦争への道を「出来事と行為の因果」として説明することにより、その「成り行き」を是認する試みに遭遇するたびに、私はアウシュヴィツのシュミットさんを思い出す。

一九七七年シュミットさんはドイツの首相として、かつてドイツがドイツの名において犯した惨劇の場所を訪れた。シュミット夫人は涙に襲われ、シュミットさん自身も姿勢を保つ努力が必要であったと回想している。その場でシュミットさんは語った。

「ここでは沈黙を要請されるが、ドイツの首相は沈黙してはならない。過去の歴史の認識なしに将来への道を拓くことはできない。アウシュヴィツと人は、政治が道徳を基礎に持たねばならないとの洞察から逃



特別講演

シュミット前西独首相を迎える アウシュヴィツとヒロシマに 人類共生の教訓を見る



石田 護